

Title	人と人の創発的ネットワーク構築に向けて：賢人プログラム活動
Author(s)	渡部，順一；佐藤，安太
Citation	年次学術大会講演要旨集，17：51-54
Issue Date	2002-10-24
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5939
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

○渡部順一（国立福島工業高専），佐藤安太（佐藤創造研究所）

1. 初めに

福島県いわき市は、福島県の南東部に位置している。人口は36万人を数え、東北地域においては、仙台市に次ぐ第二の都市である。また、工業（製造品）出荷額は1兆円を超え、東北第一位である。しかし、電子機械産業の集積している山形県米沢市あるいは岩手県北上市、同じ県内の郡山市と比較すると、産業振興の面からはこれまであまり注目されてきていなかった。産業別の出荷額と見ると、電気が約30億円、化学が約25億円、輸送が約10億円の出荷額となっており、これら上位3業種で工業出荷額の約6割を占めている。

2002年7月、国立福島工業高等専門学校では、株式会社タカラ 最高顧問佐藤安太氏（現非営利法人ライフマネジメントセンター理事長）と協力して、「人と人の創発ネットワークの構築」をテーマに、21世紀に向けた新しいものづくりや新しい経営についての研究を目的として、共同研究を行うこととなった。この研究は、筆者が「賢人プログラム」活動と呼んでいるものである。

日本の経済繁栄を支えてきた人材、すなわち賢人が今引退する時期を迎えている。経営者あるいは現場の技術者として、ものづくりを担った人達の精神を伝承していくことが重要である。また、少子高齢化や人材の他地域への流出など、その地域リーダーをどのように育成していくかも重要であると考えている。こうした考えから、賢人達のものづくり精神を次世代に伝えていく活動が必要である。

今回の発表は、地域発のプロジェクトとして事例発表を行うものである。

2. 佐藤安太氏と株式会社タカラの歩み

佐藤安太氏は、1924年、現在の福島県いわき市三和町に生まれた。1943年旧制磐城中学を、1945年旧制米沢工業専門学校化学工業科（現山形大学工学部）をそれぞれ卒業した。1955年、東京都葛飾区宝町に佐藤ビニール工業所を設立、1961年、株式会社タカラビニール工業所に改組社名変更を行った。この年、「だっこちゃん人形」が大ヒットした。1966年、株式会社タカラに社名変更を行った。

以後、「リカちゃん人形」、「人生ゲーム」、「チョロQ」及び「フラワーロック」などのヒット商品を世に送り出している。最近における株式会社タカラは、「ペーパーブレード」のような子供向け玩具から、「e-kara」、なんちゃってシリーズのようなバラエティグッズまで幅広いエンタティメント産業として、企業業績を伸ばしている。（<http://www.takaratoys.co.jp/>）

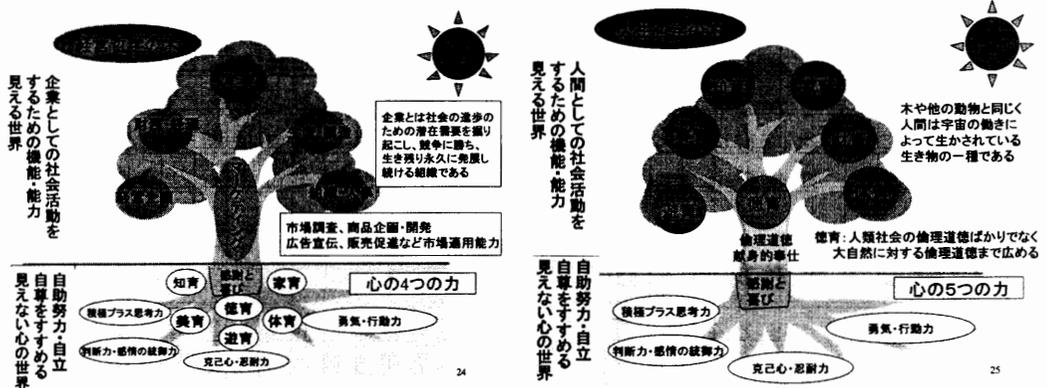
2000年に、佐藤氏はタカラのすべての役職から退いた。2001年、株式会社佐藤創造研究所を創立、東京都葛飾区の企業者に対して経営塾を開催していたが、経営哲学から生まれた人生哲学について思いを巡らせるようになった。その思いから、賢く成功する正しい生き方について、「7育・5心・3V法」を生み出すに至った。

7育とは、徳育・知育・体育・家育・美育・遊育・財育と名づけられた人間としての社会活動をするための機能、能力のことである。5心とは、感謝と喜び、積極プラス思考、判断力・感情の統御力、克己心・忍耐力、勇気・行動力という自助努力・自立・自尊をすすめる見えない心の世界である。3Vとは、目標(Vision)、挑戦課題(Venture)、成功(Victory)である。

この手法を活用すれば、「悩みや迷い、不安やストレスが消えて、生き方に自信が生まれる」、「人生の価値観のレベルが上がり、『人間力』が強化され、人格が磨かれ、信頼と尊敬が集まる」、「自分の生き方の自己管理ができるようになる」、「自分の生き方が整理して発表されるようになるので、『自己PR』が出来るようになる」、「潜在能力が飛躍的に高まる」、及び「健康になる」といった実践メリットがあるとされる。

これまで、いわき市幹部職員研修、東京での中小企業経営者との「佐藤安太実践経営塾」、東京都葛飾区幹部職員・企業経営者向け講演会などを通じて、この方法の普及、啓蒙に努めてきた。

図1 佐藤安太氏による「経営哲学の木」・「人生哲学の木」



4. 佐藤安太氏との賢人プログラム活動

(1) その背景

大学等の高等教育機関の役割は、「教育」と「研究」とされてきた。近年になり、「地域貢献」も役割の一つとして重要ではないかと議論されるようになってきている。「地域貢献」のなかで、地域から企業あるいは産業を創出していく活動には、大きく分けて「民間等の共同研究」、「大学からの技術移転」及び「大学発ベンチャーの輩出」の3つがあるとされる。こうした役割の変化をどのようにして教育

に取り入れていくのが課題であり、例えば、筆者はこの大学発ベンチャーの輩出について、郷土の生んだ偉人に触れ合っていくことによって、自らの手本とする創業者精神伝承教育プログラムが行えないかどうか検討していた。

また、筆者は福島高専コミュニケーション情報学科で「人間関係論」を教えている。その中で、組織における個人のキャリアとして、『経営組織』（金井壽宏著、日経文庫、1999年）を基に「キャリア・コーン」、「内的キャリアデザインとキャリア・デザインという発想」、及び「生涯発達とキャリア」について、分析手法について紹介している。しかし、人生の過渡期を乗り越える具体的手法について実習を行いたいと常々考えていた。

こうしたことから、郷土の生んだ偉人である佐藤氏とともに、ものづくり精神における「人と人との創発的なネットワーク」実践研究を行うこととした。

(2) 賢人プログラム活動の内容

今回のプログラムでは、講演会、見学会、及び講義の3つの側面からアプローチすることとした。

① 講演会

学生達は「おもちゃのタカラ」は知ってはいても、いわき市出身でその創業者の佐藤安太氏について詳しく知っているわけではない。そこで、佐藤安太氏に、氏の生い立ち、ヒット商品づくりの考え方を紹介していただくとともに、氏の人生哲学についての講演をお願いした。

② 第1回講義

講演会を受けて、筆者が生涯発達心理学の面から、人生の過渡期についての分析枠組みを紹介する。次に、その過渡期について、佐藤氏が生み出した「7育・3V法」（今回「5心」は取り上げないこととなった）を通して、過渡期を乗り越え賢く成功する手法について講義をお願いする。

③ 見学会

佐藤氏の経営哲学、あるいは人生哲学から生み出されたものづくりについて、実際に目で見てもらうために見学会を企画した。

今回見学する「リカちゃんキャッスル」は、タカラのヒット商品である「リカちゃん」を製造するとともに、ガラス張りにして工場を見渡すことのできる2階にこれまでの「リカちゃん」を展示するなどテーマパーク型の工場である。

今回のプログラムに参加する学生にアンケートを取ったところ、いわき市から車で1時間のところに立地していながら、ほとんどの学生が行ったことがないという結果であった。

④ 第2回講義

第2回講義では、佐藤氏の「7育・3V法」に基づいて、実習形式により、「7育検討表・7育計画表」の作成を行うこととしている。

⑤ 第3回講義

生涯発達心理学（D・レビンソン著、南博訳『ライフサイクルの心理学』講談社学術文庫、1992年。原著、1978年）によれば、男性のライフサイクルでは、17歳から22歳、40歳から45歳、及び60歳から65歳に人生の過

渡期が来るとされている。

そこで、学生、筆者、及び佐藤氏がそれぞれの各年代を代表して、過渡期でどのようにして乗り越えようとしているのか、あるいは乗り越えたのか発表、報告することとした。学生については、個人のプライバシーの問題もあるので、グループそれぞれで「7育」について発表してもらう予定である。

なお、こうした活動を通じて、佐藤安太氏と福島高専の関係が深まり、この活動とは別に40周年記念講演会をお願いすることとなった。

表1 活動プログラム

	講演会	見学会	講義
9月	学科講演会 「おもちゃで学んだものづくりのさまざまな形～ケーススタディ」 ・コミュニケーション情報学科 3・5年80名対象		
10月		リカちゃんキャッスル見学会 ・コミュニケーション情報学科 3・5年39名対象	第1回 「7育3V法」とは 第2回 「7育検討表・7育計画表の作成」 第3回 「検討表・計画表」発表 ・コミュニケーション情報学科 3・5年39名対象
11月	40周年記念講演会 「(仮題)21世紀の生き方を考える」 40周年記念講演 ・来賓、教職員代表等		

5. 終わりにかえて

佐藤安太氏とのプログラムが成功するかどうか分からない。しかし、学生達が佐藤氏と知り合うことによって、学園祭にタカラのクリエイターを招きシンポジウムを企画するなどの活動が起きている。

佐藤安太氏との出会いが、学生達に人と人との創発的なネットワークを構築するきっかけになったのではないかと考えている。

今後、様々な郷土の偉人とともに、「賢人プログラム活動」を行っていきたい。